

## 第3回 宗門教学会議

# 幸せ・現代社会・宗教

開催日 2014年12月5日

二〇一四年十二月五日、第三回の宗門教学会議が開催されました。テーマは「幸せ」です。「幸せ」は「幸福」とも表現されますが、「幸福」という言葉は、happinessやhappyといった言葉の翻訳語として定着してきたものであり、仏教では伝統的に「幸福」という言葉を、ほとんど用いることがありませんでした。また、「幸せ」という言葉についても、元々「仕合わせ」と書いており、したごとと、したごとが合う、つまり「めぐりあわせ」ということが含意され、私たちが一人ひとりで生み出すことのできるような事態を意味してはいませんでした。仏教でいえば「ご縁」に近いような意味であり、現代の「幸福」「幸せ」という言葉の持つ意味とは、必ずしも一致していないと言えるでしょう。

この「幸せ」「幸福」といった言葉が、今、巷に溢れています。書店には、心理学・脳科学・経済学・医学・統計学など様々な立場から書かれた「幸せ」についての本が並んでいます。出版社の方にお聞きすると、「幸せ」についての本は大変に売れているそうです。しかし、これほど「幸せ」についての本が並んでいるということには、「幸せ」の形が、それだけわかりにくく、見えにくい不確かなものになっている

ということでしょう。「幸福のジレンマ」という言葉もあります。豊かになれば幸せになれると一般に考えがちですが、実際にはそうはならないことを意味している言葉です。私たちが生きている現代社会は、まさしく「幸福のジレンマ」と呼ぶべき迷路に入り込み、出口がわかりにくくなっているのではないのでしょうか。この「幸せ」のインフレーションとも言うべき状況だからこそ、人々が何に迷い、何に絶望し、どのような悲嘆を抱えているのかを、そして宗門がどのような価値を発信していくべきか、「幸せ」というテーマから問いかけようというのが、今回の宗門教学会議の趣旨です。

さて、こうした様々な領域の中で説かれる「幸せ」とは、いったいどのようなものなのでしょう。そして、私たち仏教者・念仏者が大切にしてきた同朋・同行等の価値と、「幸せ」は接点があるのでしょうか。そうした問いを根本に持ちながら、この日、「幸せ」をテーマとして議論が行われました。

本稿は、第一の提言を行っていたいた猪口孝先生（新潟県立大学学長、東京大学名誉教授、元国連大学上級副学長）の講演内容の記録です。

## 石上総長挨拶文

これより、2014（平成26）年度、宗門教学会議を開催いたします。

宗門教学会議とは、名称からご推察いただけますように、宗門の教学態勢を確立するために設置された会議です。教学態勢確立のためには、教学そのものの充実も重要ですが、広く現代社会の情勢や潮流について、謙虚に学び続けることを欠かすことはできません。

今年度は、「幸せ」をテーマとし、新潟県立大学学長の猪口孝先生、日立製作所フェローの小泉英明先生、またコメンテーターとして兵庫大学講師の本多彩先生、さらに宗門教学を代表する立場から徳永一道勸学寮頭にご参加いただきました。大変にお忙しい方々で、こうしてお集まりいただけるだけでも、希有なことであり、深く感謝申し上げます。

仏教では、「幸福」という言葉は、あまり用いられません。「大正大蔵経」

という仏教の一大叢書を探ってみても、ほとんど「幸福」という漢語表現の用例がありませんし、どの用例も、現代の happiness の意味で用いられてはおりません。

それらの用例を見ると、そもそも「幸福」という語は「さいわいに」という意味で読まれており、「折よく」「機会にめぐまれる」という意味で理解されているようです。この意味の中には、縁に左右されるを得ない人間存在に対する洞察が反映されているように感じられます。仏教では、「縁」という言葉を大切にしてきましたが、この言葉の中にも、めぐり合わせや出会いの大切さという意味がこめられております。

しかし、現代社会の「幸福」は、意味が違つております。

科学の発展とともに、積極的に幸福を求めることが出来るようになりました。

それは、仏教から見れば、欲望、煩惱と分かちがたい関係にあるように感じられます。欲望を肯定していくというあり方が現代社会の幸福であるならば、仏教から肯定していくことが困難な面もありましょう。また、「死」を不幸と理解するならば、私たちは究極の不幸からは逃れることが出来ないというジレンマも抱えているわけです。

会議の後半には、徳永一道和上を中心として、「幸せ」について教学的な対話がなされるとお聞きしております。現代的な「幸せ」の理解、脳科学や子どもの心から見た「幸せ」、それぞれの文化圏における「幸せ」の違いについての知見を頂戴し、教学態勢の確立の歩みが進みますことを心より念じあげ、開会のご挨拶とさせていただきます。

最後になりましたが、諸先生方におかれましては、長時間にわたる会議となりますが、宗門の未来のために、何卒お力添えの程、宜しくお願い申し上げます。

が、あると思います。

## 第一の提言

国際政治学者として活躍されている猪口孝先生は、お寺で過ごした少年期をはじめとして、人生を振り返りながら、「幸せ」についてお話しくださいました。

## 現代社会と幸せ

私たちの生活する日本も含め、東アジア社会は第二次世界大戦も含め、多くの戦禍を経験し、大きな痛手を被りました。その後、東アジアは、戦争の灰燼から奇跡的な回復を達成します。しかし、私たち日本を含め、東アジアは他のアジア地域と比べて、決して幸福な社会とは言えないようです。なぜ、そうなのか。今日は、自分自身の経験をお話ししながら、「幸せ」について考えてみたいと思います。

## 猪口孝氏

### トンボ捕り

記憶をたどると、小学校にいる時が一番楽しかったですね。新潟の母方のお寺で過ごした日々は、虫を追いかけるのに夢中で、その時の経験から、好きなことなら夢中になって、情熱が生まれ、幸せになれるという気持ちになったように思います。特にトンボ捕りには夢中になり、お寺の庭を駆け回っていました。

自分の好きなところで、あまり他人がやらないようなことを一生懸命にやってきました。そのためか、つきあいが悪いというところがあったかもしれませんが、研究者として論文や本を沢山書きましたが、それは好きなことでしたから。ただ、職場を離れるとつきあいやいもいんですよ（笑）。一つには、何かに夢中になる幸せ

### 大火事と病気の思い出

小学校六年生の時には大火事がありました。新潟大火と呼ばれた火事で、火が近づいてきて、早朝の暗闇の中、火が襲いかかってくるという印象でした。何も持たずに逃げて、トンボの標本も含め、全部が燃えてしまいました。その時に、「無常」ということも感じ、それが生き方に反映されているように思います。

それから、その翌年、六月から十二月まで、ほとんど病院にいました。手術を5、6回しました。二期期の一番最後の日に、学校に出ていったのですが、担任の先生も出席したのを気がつかないで二期期が終わりました。一九五〇年代だったから医学も好い加減でして、お腹が、開いたままで登校しました。その時に、「人間は死ぬんだな」と感じました。「死は近い、いつでもある」と思いました。そういう、いつでも死ぬということがあ

### 東アジア人はなぜ不幸なのか？

——『データから読むアジアの幸福度』より ①

猪口先生はご著作の中で、東アジアの不幸について次のように、三つの原因を示し、分析されています。  
東アジアは多くのことを達成した。：しかしいったん達成がなされると、いくらか虚脱感が出てくる。東アジア人はすべてのアジア人のなかで一番幸福だとは感じていない。これは偶然そうなっているのではない。ここに幸福な農民と不幸な百万長者の幸福の逆理がある。所得からみたら、南アジア人は一人あたりの所得は最低であるが、一番幸福なのである。

(二七—一八頁)  
生活の質から東アジア社会をみると、二〇世紀前半でいったん失われたものを回復し、世界の奇跡といわれる時代を経て、二一世紀には、達成したものに虚脱感を感じはじめているところである。……幸福感に影を差す主要因は①大家族から核家族への移行、②宗教的世俗主義の進展、③経済活動、技術進歩、グローバル化の進展による生活のテンポの加速化である。世界の経済のダイナミズムにおいて一つの軸となる地域として生活のテンポも速くな

り、東アジアの人々は世界の波乱に巻き込まれ、将来に不安を強く感じている。(三二頁)  
②に信仰心が薄れ、社会が世俗化していることが幸福度を下げていると指摘されています。また、南アジアの高い幸福度との関係から分析されていることが、宗門にとつて興味深い点です。先生のご著作の中では、インドやミャンマー、マレーシアといった国々では生活の多くの側面において満足度が高いことについて、宗教との関係から分析されてもいます(二三—二三頁)。なお、この点については、質疑応答でも話題となりました。

### 不安について

脳科学者で理化学研究所・研究員のジ

ると思えば、いまやるべきことがあると、そんなように思えるようになったのです。逆説的ですが、死を意識することで得られる幸せもあると思います。

### 一緒に楽しい時間を作る

さて、こんなふうにしやべっていると、楽しい人が集まってきました。

日本に欠けているのは、一緒に何かを作るという作業を積極的にやるといふことではないでしょうか。そのためには、もっと社交が必要です。しゃべって、波長の合う人を見つけることが大切で、一緒にすると、相乗効果で力が上がって、いいことがあるのではないかと、いろいろが、僕の考えです。これはぜひ、みんな、もうちょっとそれぞれの立場でやっていただきたいと思います。本願寺でも、ぜひやっていただきたいです。一緒に何かを作るのいいのではないかと思うのですが、そういうのがダントツで少ないのが、日本です。会話は、一緒に作るためのきっかけです。

この歳になっても、誕生日くらいは、妻にケーキくらいは準備します。歳のかずだけ、薔薇の花を送るとかもいいです

ーナス・チャオと政治学者で元アメリカ大統領補佐官のズビグネフ・ブレジンスキーというひとが書いているものを読んだことがあります。その中に、人間は不よね。その時、その時、「一緒に何かをやった」という記憶、それが、人生を幸せにしていくのではないのでしょうか。これからも、何か、一緒にやるということに精を出したいと思っています。こんな感じで、楽しい時間を作っていると、あまり不安に駆られなくなる、そういうことが重要ではないでしょうか。例えばお寺でも一緒に何かを作る。それが思い出になり、安心になるのではないのでしょうか。これが私の幸せの四つ目の提案です。

### 《質疑応答》

質問の時間では、猪口先生のご著書『データで見るアジアの幸福度』(岩波書店)のことについて質問が出ました。

(——先生のご著書の中で、信仰心と幸せの相関関係について言及されていますね。)

中国や社会主義の国について、信仰心が低いですね。それは非常に顕著に出ています。一方で、南アジア。インドやパ

安にかられているということが書かれています。幼少期は、そういう不安に覆い尽くされているのかなと思いました。新潟ですから、お米を作るといふことが、そうなんですよ。田植えも、草取りも、気候の変化をよくよんでしっかりと仕事の段取りをやっているかないといけなかった。お米は、そういうふうには、心配しながら作っていくのです。人間は、やっぱり不安なんですよ。アメリカの大学に留学して論文を書いている時も、心配してあまり眠れなかったです。それでも何か書いて、博士になって帰ってきた。この不安は、幸福度を下げます。特に私たちが生活する東アジア社会では、将来への不安が大きいと分析されています。不安を減らし、安心が増えていくことが、幸せにつながると思います。そのような社会作り、心のあり方について、真面目に考えようというのが、幸せに関する三つ目の提案です。

## 「一緒にする」が実現できているか？

—『データから読むアジアの幸福度』より②

猪口先生は、ご提言の中で、ご夫婦の話も例に出されながら、一緒に何かをするということの大切さを提言されました。また、日本人は、その点が弱いとも指摘されました。ご著書の中から、このポイントに関連する分析を紹介しましょう。

中国、台湾、香港、シンガポール、韓国、ベトナムでは（子どもが学んだ方がよいと思うことについて）次の三個が突出している。すなわち、「独立」「勤勉」「正直」である。それに対して日本人は「思いやり」だけが突出している。「独立」は低く、「勤勉」は強調

されず、「正直」は奨励されていない。（一五四頁）

この分析だけだと、日本人は「思いやり」を大切にしているのだから、日本は「一緒にする」ことが実現されているように思われます。しかし、次のようにも分析されています。

家族や親戚からの情緒的な支援が非常に多いのは中国や台湾の社会で、韓国や日本の社会はそれほどでもない。家族や親戚からの財政的支援は中国社会でもっとも頻繁である。人からの手助けがもっとも頻繁なのは中国社会であり、台湾社会である。同様に、友人、

同僚、隣人からの情緒的支援がもっとも頻繁なのは中国社会と台湾社会である。財政的支援が友人、同僚、隣人からくるのは最大が中国であり、最少が日本である。（二二頁）

このように、思いやりが教育すべき価値の上位に来ており、日本人は過剰なほど他人のことを気にする一方で、支えあいや相互扶助が実現されていないのが日本社会の特徴でもあるのです。豊かさや幸福とがジレンマとなることの理由が、ここにあると言えるかもしれません。また、私たち宗門は「御同朋の社会をめざす運動」と実践運動を名付けています。宗門のめざしている目標から見ても、ここに指摘されている相互扶助が実現されていないという日本社会の特徴は、注目すべき課題と言えるでしょう。

キスタン、バングラディシュといった国では信仰心が篤いですね。自分が置かれている現状や運命について受け止めるこ

とができることが、幸せにしているのではないかと思えます。先ほど、中国のことを言いましたが、東アジアは世俗化の

傾向が強くて、韓国も宗教から離れて、世俗的世界観が非常に強くなっていきます。宗教も、信仰というよりも、儀式を

実際にやることに重点が置かれています。信仰でも儀式でも、一緒にするものなんですよね。上智大学の教会に行くと、フィリピンの人が非常に多いんです。彼らは、一緒になやむし、一緒に歌う、一緒にいろんな活動をするのです。そういう一緒にやろうということの一つの契機となるのが宗教なんですよね。

ボとエダマメ論——何が夢をかなえるのか（西村書店）、また原稿の途中にも引用させていただいた『データから読むアジアの幸福度——生活の質の国際比較』（岩波書店）がお奨めです。次号では、第二提言の小泉英明先生の講演内容をご報告させていただく予定です。

この多様な内容を含む「生活の質」から、「幸福」という問題にアプローチしているのだが、幸福に関連する多くの指標がある中で、宗教に焦点が当てられている。すなわち、グローバル化の中で「核となる宗教の世俗化・弱体化」が、幸福感に陰を差す三つの要因の一つに数えられているのである。この点は、われわれ宗教者にとって注目のべき点と言えるだろう。

以上は、教学会議での猪口先生の講演内容を、抜粋しまとめたものです。「人生の達人」と言えるような先生のご生涯を紹介していただきながら、「幸せ」についてお話しくださいました。全体をご紹介できないのは残念ですが、「無常」「死」と向き合うことが「幸せ」にとって重要であるといった宗教的なテーマにも言及されながら、とても楽しく、分かりやすいお話でした。まさしく、お話を聴かせていただいている時が、幸せな時間であったように感じられた講演内容でした。なお、猪口先生の講演に関連する内容にご興味を持たれた方には、『トン

※『データから読むアジアの幸福度』についてコラムに引用した『データから読むアジアの幸福度』は、岩波現代全書（岩波現代全書04）の一冊として発刊された。一言でいえば、アジアの幸福度について「生活の質」という側面から調査、検証を行った書物である。本書の「まえがき」によれば、これまでアジアにおける「生活の質」についての精密な調査が行われてこなかったようである。そのような状況下、健康、家族、価値観や規範意識、子どもに示つける規範や価値、高齢化、平和、紛争、政治志向、民主主義、経済状況、信頼などの経験的な現実を、世論調査を通して実証的に分析した結果が本書の内容である。